

HANAGATA

現代的なセンス×古典的手法で魅せる、狂言の世界

なんと！今回上演される狂言「柿山伏」は、小学校6年生の国語の教科書に載っているそうです。授業で「やるまいぞ、やるまいぞ」と朗読している子どもたちを思い浮かべると、難しそうな狂言もグッと身近に感じられます。



1976年に発足された「花形狂言会」が世代交代し、現在のメンバーとなったHANAGATA。ローマ字に改名したのは「古典・新作にとどまらない表現に挑戦していこう」という思いから」(逸平)。それを体現するように、古典「蟹山伏」を現代の笑いにアレンジした作品や、落語を元ネタにした演目などを上演しています。

そうした創作の根底には、茂山家に伝わる家訓「お豆腐狂言」があります。「気軽に誰にでも楽しんでもらえる狂言を目指さない」という教えです」(千五郎)、「一見角張っているけど、さわってみるとブルブル柔らかか」(茂)という通り、味わい深く誰からも愛される舞台を繰り広げます。

そんな狂言の名家に生まれた皆さん。「狂言師で良かったことは家族が仕事仲間なこと。悪かったことは家族が仕事仲間なこと」(逸平)、「ずっと狂言をしていられることが良かった。ただ土日と平日夜に働いているので、友達と遊ぶ時間がない」(千五郎)と思も様々。これまでも印象深かったエピソードを聞くと、「毎回です。つまり今日がとっても深いエピソードの日になります！」(宗彦)とのこと。狂言界に巻き起こる新風は、吹き止みません！

取材・テキスト=スタッフ 後藤友介 photo: ©飯島隆

本公演の見どころは？

ズバリ HANAGATAメンバー「問」答！



茂山千五郎



狂言をよく知る人には全く違和感がない演出でも、知らない人から見たら変なことたくさんある。それを舞台化した『my sweet home』は注目です。

茂山宗彦



全部でしょ!!!

茂山茂



スタイルの全然違う作品ばかりなので、皆様のお気に入りを探してください。個人的には『my sweet home』の訳分からん感が好きです。

茂山逸平



新作はもちろん楽しんでいただきたいですが、ある意味、古典作品の強さを知っていただける公演でもあります。

茂山童司



600年以上続く伝統的なコメディアンである狂言師が、全身全霊でバカバカしいことをやる。その面白さにハマってください!!!

狂言の魅力を解説

コバマサ先生、もっと教えて!

笑いの限界を突破する

狂言とは何か…。権威ある事典(新訂増補 能・狂言事典)を開いてみましょう。曰く「南北朝に発生した中世的庶民喜劇で、(中略)日常的なできごとを笑いを通して表現するせりふ劇。常に比較される能の場合は、さらに古い時代の物語(『平家物語』などを題材にして幽玄に(上品に)表現するのに対し、狂言はもっぱら「笑い」によって世界をかく乱することを目的としています。

狂言には現代の日常にもいそいそ愛すべき、親しみやすい人物や、ちよつとそばにはいてほしくない人物がたくさん登場します。そして、必ずなにかのドラマが展開されます。ドラマとは言っても、複雑な政治劇や甘い恋愛物ではありません。ドタバタ喜劇のオンパレードです。それが現代人にもわかるセリフと大仰な仕草で展開されているのが狂言なのです。「狂言は『万葉集』の頃には「たわごと」と呼ばれていました。人をたぶらかす空々しいことの意味です。最近あまり耳にしません。「狂言強盗」と言うときの狂言もそれに当たります。つまりは天下国家に大なたをふるうという

意図は、狂言にはどこにもありません。しかし、だからこそ中世の庶民のたわいもない笑いが現代人にも通じ、劇場を、世界をその笑いで揺り動かすのです。今回は京都を中心に活動している大蔵流・茂山家の若き5人が、「これも狂言なの?」と思わせするような演目も含めて、さまざまな笑いを私たちに届けてくれます。今年9月に十四世千五郎を襲名された正邦さんを当主として、弟の茂さん、そしてふたりの従兄弟の宗彦さん・逸平さん兄弟、さらに又従兄弟である童司さんという、比較的年齢も近い5人が、狂言の限界に挑戦してくるんです。もともと、舞台に出てくるだけで面白い茂山千五郎家にとつては、この程度の舞台など「限界」ではないかもしれませんが、彼らに対する最高の賛美は、笑いで示しましょう。人から笑われる商売。なんてステキなお仕事ではないでしょうか!

テキスト 小林昌廣
1959年東京生まれ
情報科学芸術大学院大学(IAMAS)教授・図書館長。芸術と哲学と医学を三つの頂点とする「三角形の中心に「身体」をすえて、独特の身体論を展開。



花形狂言2017 冬のツアー
2017/1/28(土)
13:00
@春日井市民会館
詳細情報は、裏表紙で
Ticket Guide